

# 生涯学習をめざす、特別な教育的ニーズのある中学生の余暇支援 ～地域福祉推進の一環として～

## その2. 学習困難児の臨床指導

### Clinical Guidance for Children with Learning Difficulties

山田 耕一郎\* 森 源三郎\*\*  
Koichiro YAMADA Genzaburo MORI

#### はじめに

学習障害に悩む児童・生徒・保護者の課題は我が国が戦後の経済的復興から、経済大国といわれる社会へのめざましい発展の中で、学校教育が産業界と呼応しながら進展することと並行的に拡大してきたといえる。

そこで、学習困難児の臨床指導の立場から研究を進め、昨年、その1として長野大学紀要第24巻4号(通巻第93号)に発表した。その研究成果と今後の課題は次の通りである。

#### 1. 研究成果

- (1) 学習困難児の指導は、できないことを補強、強化するのではなく、出来ることを使って、文化の一端や本物の文学・芸術の感動を習得していく方略をとる。
- (2) 文章の意味の汲み取りに困難さを示す子どもが多いが、そのつまづきを乗り越える方策として、読み聞かせによって文学の感動に浸る、その上で、意味の理解に導き、もっとよく知りたいという意欲を喚起して、文字の読みに取り組みさせる。
- (3) 創作教材の工夫を重ねることによって、文学の感動を引き出すことができるようになった。その上で、意味を掴みやすくしていく支援が大切である。

#### 2. 今後の課題

- (1) 国語、算数・数学、英語など主要教科の指導すべき基礎的、基本的な内容の整理。
- (2) 理解しやすい教材の工夫。
- (3) 身近にある機器の活用と学習意欲の向上を図る。
- (4) 手作業を伴う学習の導入。
- (5) 空間認知力の向上、注意力の拡大。
- (6) 教育科学と周辺理論の整理と応用。
- (7) 社会生活技術訓練 (Social Skill Training) とグループワークの併用による自信の回復。

#### I. 研究目的

特別な教育的ニーズをもつこどもの余暇支援と学習支援を行い、より良い改善策を探求し、地域の中学校と連携して、地域福祉の一環として役立つよう、そのあり方を考える。

#### II. 研究計画

- (1) 準備期間 (5～6月)  
地域の要望、市内中学生と長野大学生との交流の可能性の調査を行う。
- (2) 余暇及び学習支援の実施 (7～10月)  
計画の実施と記録収集を行う。
- (3) 支援活動分析期 (11～12月)  
記録の整理、分析を行う。
- (4) まとめの時期 (1～2月)  
報告書の作成、反省会の開催

\*社会福祉学部教授  
\*\*社会福祉学部教授

### Ⅲ. 研究経過

- (1) 準備期間 (5～8月)
  - ① 地域の要望の調査は市内中学の担任の先生から具体的課題の提示を得て方向性が定まったが、実施計画を立てる段階で場所や安全対策等の問題点があがり、計画の練り直しが必要となった。
  - ② 上田市教育委員会の助言も得て、市内7中学校に呼びかけをおこなった。
- (2) 余暇等支援の実施 (9～11月)
  - ① 第一回 (9月6日) 長野大学
  - ② 第二回 (10月4日) 長野大学
  - ③ 第三回 (11月1日) 長野大学
- (3) 活動分析期 (11～12月)  
記録の整理、分析を行う。
- (4) まとめの時期 (1～2月)  
資料の分析と次期の研究継続について担任会を開催して検討する。

### Ⅳ. 研究方法

- (1) 対象児の募集  
上田市内の7中学校に呼びかけを行い希望者を募集したところ、N中学校とS中学校から各1名、計2名の申し込みがあった。
- (2) 指導内容
  - ① 余暇支援 (レクリエーション、グループワーク)
  - ② 学習支援 (国、数、英、社)
- (3) 指導体制
  - ① 余暇支援  
研究担当者 教授 森源三郎  
活動支援者 研究生 多賀聖起、金海順、  
学部4年 吉田佐知子
  - ② 学習支援  
研究担当者 教授 山田耕一郎  
活動支援者 学部3年 松山葵、小林珠美、  
西沢藍、名取恵  
研究協力者 塩田中学教諭 内田潤一
- (4) 研究活動のサポート  
研究費用として、長野大学平成15年度地域研究・一般助成金Bに応募し、審査を受け、交付決定を得て、次のような支出をした。

- ① 保険加入費
  - ② 市内中学と連絡、通信費
  - ③ 教材作成費
  - ④ 記録収集、作成の為の機器の購入費
  - ⑤ 研究用備品 (余暇用教具) の購入等
- また、市内7中学には、担任及び保護者に向けて、その都度連絡を取り、協力を得た。

大学までの送迎は保護者の管理下において安全を期してもらった。

### Ⅴ. 研究の内容

#### A 余暇支援

1. 余暇支援の課題 提案者 内田潤一  
義務教育時期の広汎性発達障害を有する児童・生徒にとっても余暇活動の有無は重要である。一般にはプレイステーションなどを代表とする、テレビゲームやパソコンといった一方向コミュニケーションのものに興味を示し、多くの時間を費やす傾向にある。

そのため、社会性という点でのスキルが乏しいこともある。また、日頃、家にこもる形となり外部との接触や刺激を得にくく、余暇活動につなげにくいこともある。

別の点では、休日の過ごし方が「親と遊ぶ」という場合も多く、特定の人物との余暇となりやすい。また、保護者からは「楽しいけれど、毎日は疲れる。他の友達も必要だ」といった意見も聞かれる。以上のことから、次のねらいを持った余暇活動支援が望まれる。

- (1) ねらい
  - ① 生き甲斐、やり甲斐。
  - ② 将来にわたって楽しめる活動作り。
  - ③ 他者との交流、仲間作り。
  - ④ コミュニケーションスキルの向上。
  - ⑤ 余暇レパートリーの拡大。
  - ⑥ 人間関係、ネットワークの広がり。

#### (2) 生徒の実態

学校では、特別な教育的ニーズがあり、情緒障害学級に在籍しているが原学級で毎日を過ごしている。給食、清掃、ホームルーム的 (連絡帳) 活動は学級で過ごす。

休日は、部の活動もしていないので、テレビゲームなど室内で過ごす機会が多い。

親がスポーツや外出に付き合っているが限界がある。

留意点として次のことをあげる。

- ① 土日を利用した余暇活動を増やす。
- ② 活動内容は余暇だけでなく、学習支援も含めても良い。
- ③ 活動の主体は生徒にあり、強制はしない。
- ④ 安全の確保、責任の所在の明確化。

## 2. 余暇活動の計画 企画者 多賀聖起

### (1) 準備

特別な教育ニーズを持つ生徒の余暇活動について幅を広げる支援を、如何に取り組むかについて考えた。

普通の学校や家庭という空間から飛び出し、大学生と共に楽しい時間をすごせる為にお互いのバリエーションをとりぞけるよう企画した。

### (2) 活動計画

当初、土曜日に中学校を訪問して活動する企画(表1)を考えたが、諸般の事情で長野大学の方で行うことになったので、最初の企画を簡略にして、スケジュールを考えた。会の名称を「長野大学で楽しく学び楽しく遊ぶ会」とした。

### (3) 活動内容

#### ① 自己紹介

社会生活技術訓練(SST)でよく用いられるカードを使って挨拶をする。

#### ② 一芸の披露(つかみ)

大学生は場の雰囲気や和らげ、打ち解ける為に、自分の持ちネタを取り入れる。

例)マジック、寸劇、なぞなぞ等。

#### ③ レクリエーション

チームをつくって遊んだり、個別対戦ゲームしたりする。

#### ④ スポーツ

ソフトバレー、バトミントン、ウォークラリー、サッカー、バスケット、マレットゴルフなど。

## 3. 指導の実際

### (1) レクリエーション 指導者 吉田佐知子

#### ① 尻尾取りゲーム

各人の腰に紙テープを1メートル位に切った物をぶら下げて、尻尾に見立てて他人の尻尾を沢山取っていく、自分の尻尾がとられるとアウトである。帽子取りゲームの変形であるが、これは室内

表1 日程(案)

AM 9:40	現地到着、準備
AM10:10	導入 手品 etc
AM10:20	白玉作り(グループワーク)
AM10:40	レクリエーション 室内ゲーム、スポーツ等
AM11:20	調理:白玉ぜんざい作り 会食、後かたづけ
PM14:00	終了、解散。

でも出来るし、攻めることと守ることへの心の集中が必要で、中学生には興味の度合いが合う。また、ゲームの中で、「やった!」、「危なかった」、「残念」、「おもしろい」といった感情が湧いてきて、楽しい上に、対面して防御活動をし、隙を見て背後にまわるなど対人関係のコミュニケーションに相当する内容を含むのでおもしろい様子である。3人1組のチームで彼らは学生や教授とチームを組んだ。Iは回りをキョロキョロしてテープを守ろうとする事と同時にどのテープを狙おうかと辺りを見渡していた。隙を見つけると駆け寄り相手のテープを奪う。みごとな早業だった。Kは隅の方にいき相手の視界に入らないように逃げるのが得意なようで学生もKのテープを奪うには作戦が必要だった。

#### ② 競馬ゲーム

二人組になり、一人が紙テープの束を持ちもう一人がハサミでテープの真ん中を切っていく、テープを切断しないでなるべく長く切っていく。二人の呼吸が合うとかなり早く、長く切ることが出来る。IやKは学生のハサミの使い方を見て同じようにハサミを使いこなしていた。回数を重ねるごとに切るスピードが速くなるのが目に見えて分かった。

#### ③ オセロ

Iは1回目の時に比べてリラックスしながら取り組んでいた。Iは勝ち方を知っているようで相手をした学生は苦戦しながら勝つことができた。そのくらい戦略を持っていて驚いた。Kは興味を示し取り組むが作戦を立てることが出来ずにいたので相手をした学生が状況に合わせながらゲームを進めた。1回目の時は全敗だったKは家でオセ

口を練習したらしく2日目の会で2回とも学生から勝利を勝ちとった。

#### ④ 輪投げ

なかなか入らないものである。それでも、夢中になって挑戦するので、3, 5, 7, 10メートルと距離を離して行って、成功感を味合わせた。IもKも回数を重ねるごとに成功率が高くなる。また身を乗り出しながら挑戦するなど自分で工夫しながら取り組む姿が見られた。

#### (2) グループワーク 指導 金海 順

この活動ではみんなで一緒に料理を作り、一緒に食べる。

2回目の会では餃子作りをした。餃子の中身は学生が前日に準備し、皮をその日にみんなで作った。まず、人数に合わせて小麦粉をボールに入れお湯を少しずつ入れながら混ぜ、少しの間寝かせる。KとIは自分から率先して生地を捏ねていた。寝かせた生地を一つ一つナイフで切り、麺棒で押し皮を作る。生地の間の中に具をのせ両側の皮をくっつける。なかなか思うようにいかない。皮からあんがはみだしたり、手にくっついたりしながら、一つ一つの作業にIやKは興味を示し取り組んでいた。

#### 4. 研究分析と今後の課題

余暇の活用は人間の営みのなかで重要な意義もっている。とりわけ、軽度の学習障害や広汎性発達障害をもつ人は余暇の活用による本人の生活機能の広がりを図っていくことが大切である。有安(2002)は知的障害をもつ人の施設における余暇活動に関して、T学園児童部での「絵画クラブ」の活動を報告している<sup>1)</sup>。園内における「絵画クラブ」活動から地域の美術展出品への発展を通して、地域の人びととの交流や美術展鑑賞会、合同美術展開催への参加、市民美術展の運営参加などを実現し、社会参加を実現していった実践を報告し、余暇の活用を通してのノーマライゼーションの実現を考察している。村中(2002)は青年期を迎えた在宅知的障害者を対象にした休日の「スパゲッティー教室」の活動実践を報告し<sup>2)</sup>、在宅障害者の余暇活用の支援の重要性を論じている。

本報告のわれわれの実践は中学生期における余暇の活用を支援する土曜日のグループ活動であるが、(1)支援対象者が少数であったこと(2)支援活動

の期間、回数が短期間であること(3)地域社会への参加が欠如していることなど、今後課題を残すものである。しかしながら、参加者個人のレベルでは(1)積極性(2)集中力(3)集団参加への意識の明確化など得られた成果は大きいと考えられる。

#### B. 学習支援

##### B-1 社会科(地理) 指導者 松山 葵

##### 1. 中学校社会科(地理)のねらい

広い視野に立って、我が国の国土と歴史に対する理解を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

##### (中学校学習指導要領)

##### 2. 基礎・基本となる内容

中学校で採択されている教科書を数冊取り上げて、指導すべき内容をまとめたところ次のような表にまとめることができた。

##### 3. 特に理解してほしい内容

A	世界の国々ー地球の表面	
a	丸い地球	地球儀
b	緯度と経度	緯線、緯度、赤道、北極点、南極点、北半球、南半球、経線、経度、東半球、西半球
c	日本と同じ緯度が低くて暑い国	赤道付近の国、緯度の高い地域、針葉樹林
d	寒い国	6大陸、3大洋、暖流、寒流、大陸、海溝、海拔
e	大陸と海洋	標準時、時差
f	標準時と時差	
D	世界の国々ー日本のすがた	
g	いろいろな分け方	7地方区分(北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、九州)
h	九州地方の8県	(福岡、大分、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄)
i	中国・四国地方の9県	(鳥取、岡山、島根、広島、山口、香川、徳島、愛媛、高知)
j	近畿地方の2府5県	(京都、大阪、滋賀、兵庫、和歌山、奈良、三重)
k	中部地方の9県	(静岡、愛知、長野、岐阜、山梨、新潟、富

l	関東地方の1都6県	山, 石川, 福井) (東京, 神奈川, 埼玉, 千葉, 群馬, 栃木, 茨 城)
m	東北地方の6県	(青森, 岩手, 宮城, 福島, 秋田, 山形)

#### A. 世界の国々—地球の表面

- ・緯度と経度のしくみがわかる。
- ・世界地図を見ながら6つの大陸がどのように位置づけられているか並べることができる。

#### D. 世界の国々—日本のすがた

- ・中部地方の9県に何県があるかわかる。
- ・中部地方9県を間違えることなく並べることができる。
- ・各県名と各県の形に合わせて描いた絵とを一致させて覚える。
- ・中部地方9県を使い、各県の地形、産業について知ってもらう。

#### 4. 教材の工夫点

どちらの教材も作業を伴った学習ができるようにした。Aの項目では、緯度と経度についての説明の自作プリントをカラーで作成して見やすいようにした。そして、6つの大陸は大きくカラーコピーし、画用紙に貼り、大陸の形に切り取った。そして、各大陸ごとに国名を記入し、裏には大陸ごとに国名についての詳細を記入した。その他、大陸を並べるために使う模造紙には赤道を引いた。

Dの項目では、自分たちが暮らしている長野県を含んでいる中部地方9県を使った。教科書に載っている中部地方をカラーコピーで拡大し、画用紙に貼り切り取った。そして、各県の裏には形に合わせてイメージできるように絵を描き、県名と絵を結びつけるようにした。さらに、中部地方9県を使い、地形や産業について表にまとめた。

#### 5. 指導の実際

##### <対象児について>

S. I中1男子 特別な教育的ニーズを持つ。柔軟性がない・表現することが苦手・運動が苦手で興味がない(以後SNE1と略す)。

K. K中3 男子 特別な教育的ニーズを持つ。明朗で穏やかな性格・やや自信がない面が行動に出る(以後SNE2と略す)。

#### 第1回 9月6日(土) 対象児：S. I

まず初めに緯度と経度のしくみについてのプリントを使い説明した。説明を聞いているだけだったので特に目立つまづきはなかった。

次に、世界地図を見ながら6つの大陸を並べた。その際、北アメリカ大陸以外は間違えず並べることができた。北アメリカ大陸をヨーロッパの下に置いてしまい、アフリカ大陸をその続きに置いてしまった。全大陸を並べ終わったところで北アメリカの位置について説明した。

全大陸を並べ終わったところで、日本を例にとり、東南アジアについて説明した。その時の指導者とI君とのやりとりである。

T：「日本がある所ってなんて言うのかな。」

I：「東アジアと…。」

T：「東って別の読み方でなんて読む？」

I：「とう。」

T：「じゃあ、南は別の読み方でなんて読む？」

I：「なん。」

T：「そうだね。じゃあ、もう一度読んでみようか。」

まずは東アジアの国について説明し、次に東南アジアの国について説明した。

#### 第2回 10月4日(土)

##### ① 対象児 I. S

最初に教科書を見ながら中部地方9県を並べてもらった。9県とも思ったよりすらすら並べることができた。

次に、各県の裏に描いてある絵を見ながらどのような形をしているか見ていった。実際にやってみると、恐竜(新潟)、フェリー(長野)、鍵(福井)など形で覚えてくれた。そこで次のように指示すると全体図を見ながら9県を構成する課題をなんなくこなした。

次に、絵だけを一つずつ見せていき、できたらこっち、できなかつたらこっちといったように分け、できなかつたら5回ずつ裏表見て覚えてもらった。

今度は絵だけを見せ「この絵はどの辺にあったかな。」と配置させてみた。

最後に教科書を見ずに中部地方を並べるよう指導したがなんなくこなし、紙に各県ごとふちどりをし、中部地方のふちどりが完成した。

## ② 対象児 K, K

最初にI君と同じ課題をやった。順調に並べていたが、所々違う場所に並べてしまった。

次に、各県の裏に描いてある絵を見ながらどの県なのかわかるようにした。一番先に覚えたのは新潟だった。静岡、山梨は絵と県名とが結びつくまで時間がかかり、わかりやすい絵の県でも間違えることがあった。(例：鍵=福井→鍵=富山など)この際、ヒントとしてわからなかったら、ちらっと県名を見せた。

最後に中部地方9県を並べてもらい、全て自分で並べられた。教科書を見ながらやったので、大きな間違いはなかった。

## 第3回 11月1日(土) 対象児 K, K

始めに中部地方の並び方の復習をした。この時、自分で覚えている県から並べてもらった。その際、覚えている県は何も見ずに並べることができたが、覚えていない県は教科書を見ながら並べた。

その後、並べたものを裏返し何県があったか聞くと、福島も入れてしまった。

次に、地形、産業についての学習に移った。そこで、気づいたことを挙げてみた。

- ・長野の産業の『民芸家具』が読めなかった。
- ・愛知の産業の『自動車整備業』の『備』が読めなかったので紙に『準備』と書き、この字だよと教えた。

最後に裏に描いてある絵を見ながら何県か確認した。愛知を福井と言ってしまい、教科書を見てもなかなか名前が出ず、静岡と言ってしまった。

## 6. 反省

今回は3回地理の教材を使って指導した。

1回目は、T小児病院(昨年度から臨床指導を行っている)で使用した教材だったが、中学校からの情報もない状態での指導だったので、対象児に臨床的に接する状態だった。しかし、前回とは違うつまずきの発見もあったので使用して良かったと思う。この教材をを使ったことで前回のT小児の反応と比較できた。同じようなつまずきもあったので、学習障害の一つの特徴として確認することができた。

2回目には新たに教材を作った。そして、中1

と中3の2人の指導をした。その内、第1回目の指導後、担任の先生とミーティングする機会を得て、情報を頂いた。I君は中1ながら使った教材をうまく活用していた。K君は中3であったが、つまずく部分が多かった。

3回目には、2回目の教材を活用できる教材を作った。今回はK君のみの指導だった。今回は漢字を読ませることが多かった。その際、漢字が読めないということが多かった。

3回の指導とも作業を伴う学習だったので興味を持ってくれた。やはり、対象児にあった教材作りは難しいと思った。反省する点もたくさんあった。

指導の方法、進め方、まとめ方についてもまだまだ勉強しなければならないことがたくさんある。これからは、参考文献を探し、学習障害を中心とする特別な教育的ニーズを持つ子の特徴について調べていきたいと思う。

## 7. 新たな教材作り

作業を伴う学習は興味を持ってくれるのもっと活用していきたい。教材は、教科書のコピーだけでなく、自作の物を増やせたらと思う。表をカラーにして見やすくする、模造紙にまとめるなど、まとめ方を工夫したい。カラーだと見やすいし興味を示してくれやすいので、できるだけカラーにする。できることなら、対象児に合った教材を作り、対象児にとって少しでもプラスになればと思う。

## 8. 本事例の考察

2人の対象児の臨床的指導の結果、次のことが考えられる。

- (1) 県の形と連想するイメージの結びつきによる県名の想起の援助は効果がみられる。
- (2) 元図に照らした県の位置関係の把握は取り組みやすい。
- (3) 短期記憶の弱さが見られる。そこで、記憶や想起に時間がかかり、不確かなものが見られる。
- (4) 平素学校では白黒の印刷物に接する機会が多く、プリント類に抵抗感がある場合が多いが、カラーのコピー教材は興味を示す。
- (5) 我が国の国土の理解を助けるために、重要事項の解説を聞かせるだけでは効果があまり

望めないが、作業を伴う学習を導入すると理解が深まっていく。その上学習意欲も見られる。

## B-2 英語 指導者 西澤 藍

### 1. 中学校英語のねらい

英語を理解し、英語で表現する基礎的な能力を養い、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解を培う。(中学校学習指導要領平成元年度)

### 2. 基礎・基本となる内容

中学校で指定されている教科書に出てくる指導すべき基礎的、基本的な内容をまとめる。次のようにまとめることができた。

A	あいさつ	
a	おはよう	Good morninnng.
b	こんにちは	Good afternoon.
c	こんばんは	Good eveninnng.
d	さようなら	Good bye.
e	初めまして	Nice to meet you.
f	やあ	Hello, Hi.
B	自己紹介	
g	「これ(この人)は～です	This is~.
h	「私は～です」	I am~.
i	「私の名前は～です」	My name is~.
C	たずね方	
j	これは～ですか?	Is this~?
k	～は何ですか?	What is~?
l	あなたは～ですか?	Are you~?
m		Do you~?
D	答え方	
n	これはあなたの机ですか?	Is this your desk?
o	ーはい、そうです	Yes, it is.
p	ーいいえ、違います	No, it is not.
q	これは何ですか?	What is this?
r	ーこれは机です	It is desk.

### 3. 特に配慮してほしい内容

- ・「あいさつ」「自己紹介」「たずね方」「答え方」を理解し、区別がきちんとできるようにする。
- ・英文を読めるようにする。

- ・英文を書けるようにする。

### 4. 教科の工夫点

- ・「LD 児は聴覚的な情報よりも視覚的な情報の方が記憶に残りやすい」という特徴を生かしてプリントをカラーにしたり、カードに絵をつけたりした。

- ・指導略案とヒントの出し方

- ①事前に作っておいたプリントを使い、「あいさつ」「自己紹介」「たずね方」「答え方」を英語ではどのように言うのかを説明する。
- ②「あいさつ」「自己紹介」「たずね方」「答え方」の英文が書いてあるカードを模造紙の上に区別して置いていく。

### ◎ヒントの種類

第1 ヒント…ヒントカード

第2 ヒント…カードの色

第3 ヒント…聴覚的ヒント

第4 ヒント…直接的誘導

- ③全部のカードを置き終わったら、対象児と一緒に一枚ずつ確認していく。
- ④カードの英文を読む。
- ⑤まとめとして小テストをする。

### 5. 誘導の実際

- ・対象児について

K. K (男) 中三 SNE2  
はじめに、プリントを見ながら「あいさつ」「自己紹介」「たずね方」「答え方」とは何か? を説明した。K君は説明を聞いていたが、所々で指導者が確認をすると答えられない場面が見られた。例えば、  
T「これは～ですか」と聞くときは、「Is this~?」を使って聞くんだよね。じゃあ、「これは机ですか」を聞くときは何て言えればいいかな? K うーん…

このような場面から、説明した直後は内容を覚えているのだが、少し時間が経ってしまうと忘れてしまう傾向があるのではないかと感じた。そこで、なるべく短く説明をしようと思い、プリントに赤い字で書いてある大事なポイントだけを何回も繰り返して指導した。

次に、カードを区別する作業をした。K君は、なかなかカードを区別することが出来ず「カードを置いてはまた手に取り迷う」という動作を繰り返

返していた。そこで指導者は、「プリントを見ながらやっていいよ」、「カードの裏に書いてある日本語訳をみていいよ」、「あいさつのポイントは何だったかな」など声かけをした。しかし、K君は、理解出来ず作業を進めることができなかった。

— K君が間違えて区別したカード—

「たずね方」の所に…Yes, it is.

Yes, My name.

「答え方」の所に……What is this.

I am kumi tanaka.

「自己紹介」の所に…Your name?

How are you?

といったカードが置かれた。

### 6. 反省

今回の指導で分かったことは、「臨機応変に指導する事」の大切さであった。

K君がなかなか作業が進まない姿を見て、声かけをしたことで終わるのではなく、一枚一枚一緒に確認をしながら作業すれば、K君により深く理解をしてもらえたのではないだろうか。K君が一生懸命カードを区別している姿を見て、途中で集中力を切ってしまう事が適切なのかを悩んでいたため、時間がなくなり、まとめの小テストをやることができなかった。

今までの指導では、指導計画通りに指導が進められたので、対象児に合った教材を作ればよい指導ができると思っていた。しかし、理解してもらえない教材を使用したとしても理解してもらえなかったもので、教材が全てではないと実感した。これからの指導では、対象児がつまづいた原因を様々な観点から突き詰めていく力を備えていきたい。

### 7. 新たな教材づくり

今回の指導で疑問に思ったことは、「K君はカードを区別する作業が苦手なのか？それとも英語を理解していないのか？」ということである。そこで、新たな教材づくりとして、一つは、2～4種類のカードを作り、同じ絵同士を一緒にするという作業を伴う学習教材を作る。もう一つは、初歩的な英語のテストを作り英語の理解力を見る教材を作る。そして、この二つの結果を見て検討を深めていきたい。

生徒の学習状態を臨床的に見守りながら改善へ向けた要素を取り出すことができれば、特別な教育的ニーズ、各々のニーズを的確につかめると思う。その為にも障害の視点などさらに文献等を調べたい。

### 8. 本指導例の考察

(1) 中学英語のねらいとして、学習指導要領では、まず、英語で表現する基礎的な能力を養うことをあげている。

そこで、本事例では、挨拶と自己紹介と尋ね方と答え方の基本的なものを整理して、視覚的に理解しやすい教材を工夫した。

(2) カードに関連した物にまとめる作業の中で、Kは「カードを置いては、取り上げる」といった、迷走状態をかなり長時間にわたってくりかえした。指導者は、すぐに誘導しないで辛抱強く見守った。

(3) 英語の場合、話言葉と文字言葉の結びつきが難しい。絵やビデオといった映像を伴ったイメージの強化を行って理解を深めることも必要である。また、実際に会話として使えるかといった確認も大切である。

### B-3 学習支援(国語) 支援者 名取 恵

#### 1. 中学校国語の目標

国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。(中学校学習指導要領平成元年より)

#### 2. 基礎・基本となる内容

中学校で採択されている教科書を数冊とりあげて、その内容をまとめたところ次のような表にまとめることができた。

A	詩、心情の読みとり	
(課題)	(内容)	
a. 「詩」とは何か	とらえたイメージを短い言葉で表現する	
b. 「親友」とは？	「親友」赤川次郎	
c. 人物の心情をとらえる。主な登場人物をとらえる	麻子、知美 「自分像」 麻子…走るのが遅い	



d. 主人公の気持ち	運動会が嫌い 知美…走るのが速い  麻子は運動会が近づくと ゆううつになる。麻子は 世の中、不公平だと思う。
e. 主人公の心の状態を 読みとる	麻子にとっては運動会の 声援が苦手→ビリになっ たりすると、すごく悪い ことをしたような罪悪感 におそわれる。
f. この単元に出てきた 新しい漢字を覚える	新出漢字…遅、嫌、矛、 盾、拍、援、飲、腰、 倒、叫

B 言葉の意味	
g. 言葉の意味を理解し て日常会話に使えるよ うにする 「決まって」とは？ 「比較的」とは？  「確定的」とは？  「客観的」とは？  「なまじ」とは？  「かささい」とは？  「不公平」とは？  「中心的」とは？ 「よりによって」とは？ 「矛盾」とは？	いつも、必ず ほかのもの比べて、わり あいに はっきり決まりそうな状 況にあること 自分の考えを入れず、物 事をありのままに見た り、考えたりするさま 余計な事をしてかえって よくない結果を招くこと を表す言葉 大声を出したり、拍手を したりしてほめること 偏ったり、えこひいきす るさま。公平ではない 物事を中心 わざわざそれを選んで 理屈が合わないこと、つ じつまが合わないこと
h. 話の内容が理解出来 ているか	麻子は走るのが遅いが親 友の知美はクラスでもト ップの速さで二人は対照 的

C 文字の形、部首	
i. 文字の形を覚える、 部首を覚える ・へん  ・つくり	文字の組み立てと部首  ごんべん…言葉を表す のぎへん…穀物、実りを 表す にくづき…人体を表す ふしづくり…人の動作を 表す るまた…手の動作を表す

・あし ・かんむり  ・たれ  ・によう ・かまえ	ひとあし…足、脚を表す あなかんむり…穴を表す つかんむり…ツの形を表 す がんだれ…がけや岩を表 す しかばね…人体を表す そうによう…走る動作を 表す ぎようがまえ…人の行動 を表す
---	---

### 3. 学習支援のポイント

教科書の文章を読んで内容を理解すること、登場人物の気持ちが表れている文を探そうにすることができるようにする。

漢字は、反復練習をして読みや、書き順を正しく身につける。

### 4. 教材の工夫点

教科書の文章を読む所では、主な登場人物を絵に描いてイメージしやすくした。

作者が一番伝えたいと思っている所や、ポイント、重要な部分は色分けをしてわかりやすくした。

漢字では、新出漢字をカードで表し、その漢字の部首の部分だけ色を変えるようにして一目で部首だとわかるようにした。

### 5. 指導略案

〈テーマ〉 登場人物の気持ちを読みとろう			
〈ねらい〉 「親友」を読んで内容を理解し、人の気持ちが表現されているところをさがす。 自分の考えを整理して伝える。			
〈展開〉			
時間	学習活動	指導内容	留意点
導入 5分	「親友」について考える	「親友」とは何だろう	
展開 20分	一場面の登場人物の台詞部分だけ読む  問題を解く	「親友」の一場面をやる 登場人物は二人  登場人物の気持ちが表されている所を探す	登場人物二人が混合しないようにする  読めなかった漢字を覚える
まと	話の感想を発	一場面のまと	話の内容が理

め 5分	表する	め	解出来ている か確認
---------	-----	---	---------------

### ヒントの出し方

- ① 人物の気持ちが表れているページを教える。
- ② それでも見つけられなかった場合は、気持ちの表れている文章の前後を示す。

### 6. 指導の実際

対象児 K. K 男子 SNE2

教科書の一場面を読み終え、言葉の意味を説明しながら問題にとりかかる中での支援者とK君のやりとり。

T: 「今、一場面を読んでみて意味のわからなかった言葉とかあったと思いますが、“ゆううつ”の意味は知ってる？」

K: 「ん…」(首をかしげる)

T: 「“ゆううつ”とは気持ちが晴れないこと、ちょっとしたことでよくよくなること。K君はこんな気持ちになったことがありますか？」

K: 「ある」

T: 「どんなとき？」

K: 「ん〜」(考えているが思いつかない)

T: 「すぐには思いつかないかな。でもたまにあるよね、こんな気持ち。じゃあ、『麻子は運動会が近づくと“ゆううつ”になる』のはなぜでしょう？」

K: 「走るのが遅いから」

T: 「そうだね。じゃ、次の問題は『麻子の矛盾した願い』とは何か」

K: 「朝早いうちにやってくれば、家の人だっで大勢来ていないのののところ？」

T: 「ん、ん。そこじゃないな。もう少し後ろの文を読んでごらん」

K: 「あっ。『早く終われ、いつまでも来るな』の所」

T: 「正解。次は『あの声援というやつが、麻子は苦手』とあるが、それはどんな気持ちからかな？ちょっと難しいよ」

K: 「『失敗したり、ビリになったりすると悪いことをしたような罪悪感におそわれる』気持ち」

T: 「正解！すごい。よくわかったね」

この問題は難しいと思われたがヒントなしに答えられた。

### 7. 反省

時間に余裕をもってゆっくり進めていく事が出来たが、対象児が思っていたよりも登場人物の気持ちを読みとれていたので、質問が少し簡単すぎたと反省している。

事前に対象児のことを把握しておく事や、この学習交流会で対象児はどんなことを目標にして参加しているのか知っていれば、本人が主体性を持った活動がもっと支援できたのではないかと思う。対象児を知ることで、その子に合わせた教材作り、指導法などをこれから考えていきたい。

### 8. 新たな教材づくり

教科書を基に、それに沿いながらも普段、私たちの身近にある物を使って教材を作りたいと思う。例えば、スーパーのチラシを使って漢字とカタカナの使い分けを身に付けてもらうなど、親しみが持てる教材をつくりたいと考えている。他にカードを使って仕分けの作業もしてみたい。これから様々な文献を参考に特別な教育を必要とする子に役立つ教材を考えていきたい。

### 9. 本指導事例の分析

- (1) 国語の教育のねらいの一つである、正確に理解し、適切に表現する能力を高める為に、昨年度経験した「読み聞かせ」教材を土台として、今回は詩を取り上げて、教材の工夫に取り組んだ。
- (2) 教科書の題材である、赤川次郎の「親友」を深く掘り下げて、主な登場人物と心情について対話形式で深めていく手法をとったところ、対象児2名とも、かなり深く読み取る対応をした。
- (3) 主な登場人物を絵に描いてイメージしやすくしたり、人物の気持ちが表れているページや段落をヒントとして出す等の教材の工夫を行ったところ、かなり効果が見られた。
- (4) 更に、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにするために、文字の形、部首について取り上げて教材の工夫を行った。
- (5) 漢字の部首の部分だけ色を変えて一目で部首とわかるように、焦点化して気づく力を引き出すように働きかけていった。

## B-4 学習支援 (数学) 指導者 小林 玲美

## 1. 中学数学のねらい

数量、図形などに関する基礎的な概念や原理・法則の理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得し、事象を数理的に考察する能力を高めるとともに数学的な見方や考え方のよさを知り、それらを進んで活用する態度を育てる。(中学校学習指導要領)

## 2. 基礎・基本となる内容

中学校で採択されている教科書を数冊取り上げて、その内容をまとめたところ次のような表にまとめることができた。

A 正負の数	
(課題)	(内容)
a 負の数を含めた数の数直線	数直線
b 数直線上で0が対応する点	原点
c 数直線の右の方向	正の方向
d 数直線の左の方向	負の方向
e 正負の数からその符号をとったもの	絶対値
f 正負の数の計算 ・同符号の計算 ・異符号の計算 ・0との加法	加法
B 文字と式	
g 個数を表す数などの代わりに文字を使う	文字の使用 a, X等

## 3. 特に理解して欲しい内容

## A. 正負の数

- ・正負の数の数的理論を十分に理解する
- ・小学校では負の数は出てこないで、身近なものを使って理解を深める。
- ・正負の数を使った計算のルールを理解し、計算できるようになる。
- ・数直線上の正の数、負の数、原点を理解する。
- ・正の数、負の数を使って加法ができる

## B. 文字と式

- ・文字が数の単位を代わりに表していることを理解する。
- ・文字を使って文字式を立てられる。

## 4. 教材の工夫点

## A. 正負の数

- ・正の数、負の数を身近なものからイメージがわくように、画用紙で温度計を作り教科書に載っている世界各国の気温を温度計を使って、その気温にあわせてもらい、プラス、マイナスという概念を理解しやすくした。
- ・正の方向、負の方向については、模造紙に家に見立てた数直線を描き、それを使用して問題を解くこととした。

## B. 文字と式

- ・教科書に載っている文字式を抜き出し画用紙にまとめた。そして文字が表している数や量の単位を絵に描き、視覚的に興味を持ってもらえるようにした。

## 5. 指導の実際

## 〈事例1〉 正負の数の指導

対象児：K・K 中3 男子 SNE2

導入として画用紙で作った温度計を使用してプラスとマイナスについて学んだ。

教科書に載っていた世界各地の気温を見ながら、K本人に「行ってみたい国はどこかある？ あったらその国の気温は何度か温度計を使って表してみて」と指示を出す。

Kはゆっくりとそして慎重に温度計を動かした。自信がないのか、温度計を動かしながらKは度々指導者の方を気にしていた。

次に展開としてカードと模造紙を使用して正の数＝プラス、負の数＝マイナス、原点＝0という用語を、+、-、0の形に切り取ったカードの表と裏に書き、Kに見せながら指導を行った。

プラスの形に切り取ったカードの表の面(正の数と書かれている)を見せて、「この言葉は他に何という言葉で言えるかな？ カードの形をよく見て」と言った。Kは「プラス」と答え負の数、原点も同様にさせて答えてもらった。

そのカードを利用して、模造紙に+、-、0、と型どった枠があり、先に使用したカードを置いてもらった。模造紙には家に見立てた数直線が描かれている、その周りには正の数、負の数、原点のカードを置く枠の他に、正の方向、負の方向と書いてある。その模造紙を使用して、正負の数の計算：加法を行うつもりだったが、対象児Kは中学3年生ということもあり、復習として用意してあった問題を解いてもらおうとしたが、Kが正負

の数の計算を少し忘れていたと言うので、同符号の計算からゆっくり復習した。

正の数、負の数の同符号同士の計算を説明しながら数問解いた、その後は、用意してあった問題カードの同符号同士の計算を解いたが、Kはしっかり理解しているようだった。異符号同士の計算については、時間をかけて問題の解き方のルールを一つ一つ確認しながら指導した。

指導はここまでだったが、Kの異符号の計算においては、言葉で説明しながら問題を解くことしかできなかつたので、一人で問題を解く時にどんな反応をするか見ることができなかつた。そしてどんな場面もKは指導者の反応が気になるのか、頻繁にこちらを見るが多かつた。

#### 〈事例2〉 正負の数の指導

対象児 S・I 中1 男子 SNE1

指導内容は事例1と同様に進めた。

温度計を使用した導入では、Sは次々に各国の気温を温度計の上で表していた。

模造紙を使用した指導の時は、S自身、数直線のイメージがしっかり身に付いていたので、同符号や異符号の加法の計算は正の方向負の方向どちらに動けば答えが導かれるのかしっかり理解できていた。Sは特に目立ったつまずきは見られなかつたが、問題の答えである数字はあっているが、符号を間違えてしまうということが何度か見うけられた。

また、問題を解いた方法をSに説明を求めたところ、自信なさげに説明をした。

しかし説明はしっかりできていたので、「すごいね！しっかり理解できてるね。」というと、照れくさそうに笑っていた。

#### 文字と式の指導

指導内容：文字と式の単元の教科書の最初にマッチを使って正方形を作るときにどんな式で表せるか？という問題があつたので、それを使ってまずは文字を使わずに式に置き換えて考えることにした。

Sは文字を使わずに表された式については計算もできていた、そして画用紙に書きだした文字式と、数や長さ、量などの単位が絵によって表された表を使って、文字はものの数、長さなどの単位を代わりに表している記号だということを説明し

た。Sはこの説明に大しては理解を示していたが、表情を見ると自信はないようだった。次に文字を使って文字式を立てようとしたが指導者自身、文字式を立てることへの説明の仕方が不十分であり、逆にSを困惑させてしまった。Sは「ここで何故文字が出てくるのか？」という疑問と文字の使い方に戸惑っていた。そこで、慎重に検討してみたいと思う。

#### 6. 反省

対象児Kの指導においては、中学3年生に中学1年生の復習を行うつもりであつたが、Kは忘れていたので、一つ一つ説明を行った。その際、模造紙を使用せずに足し算、引き算という考え方で答えをだす方法で指導した、しかし、模造紙を利用して数直線上の上で答えを導き出させ、正の方向、負の方向をイメージさせながら学習を進めるべきだつたのではないかと思う。

また、K、Sの二人に言えることだが、学習の理解が成されているかどうかの確認を学習のまとめとして行うべきであつたと思う。

対象児Sについては、指導者の教材研究が不十分であつたので、次への課題として取り組みたい。

#### 7. 新たな教材づくり

数学ではイメージのわきやすい、親しみのもてるものを教材として作ることが重要であると思う。

数学の学習目標である、数量、図形などの基礎的な概念や原理・法則の理解を深めやすくするものを、生活の中から見つけることで、数学というものがさらに身近なものになり、受け入れやすいものになるよう教材研究と共に重点を置いて考えていこうと思う。

#### 8. 本指導事例の考察

- (1) 数学教育の目標の内、数量・図形に関する基礎的な概念や原理・法則を理解する力の向上を課題として臨床的指導に取り組んだ。
- (2) 教材としては、生活の中で、プラスやマイナスの概念を分かりやすく理解できるように、工夫した結果、対象児に効果が見られた。
- (3) 更に、数学的な表現や処理の仕方を習得する力については、文字式を取り上げ、教材の工夫を考えた。こちらは、今後更に検討する

必要がある。

- (4) 対象児の中に、指導者の顔をしばしば見ながらの思考行動を示したが、そこには、自信のなさを解消しようとする、心理的訴えが内在していると思われるので、心理的ケアを含めた課題が残っている。

#### IV. まとめと今後の課題

##### A. 余暇支援について

特別な教育的ニーズとは、通常の教育の配慮の基で対処できる「一般的教育的ニーズ」ではすまない質と程度を必要とする子供のニーズをさす。その特別な対応の中に物的条件、人的条件、ソフトの条件（教育課程、カリキュラム）等が含まれると窪島努氏は指摘している<sup>(3)</sup>。

本研究でも、特別な教育的ニーズを持つ子の余暇支援として、場の設定（学校や家庭以外の教育的配慮を持つ一般的集団）や内容（個別・小集団ゲームやグループワーク）の工夫によって、心情面の強化に大変役立つことがわかった。

##### B. 学習支援について

- (1) 知的障害や視覚・聴覚障害を伴わない特別な教育的ニーズを持つ子とは、次の様な子供が含まれている。

###### ① 学習障害

原因として、中枢神経系の何らかの機能障害によるものと推定され、情報の受け止め、整理、関係づけ、表出に留意する。

###### ② ADHD<sup>(4)</sup>

不注意、多動性、衝動性という三つの行動を特

徴とする障害である<sup>(5)</sup>。

###### ③ 高機能自閉症

おおよそIQ70以上の、明らかな知的障害がない自閉症を指し、対人関係の難しさやこだわりを持つ子を言う。

###### ④ アスペルガー障害

対話や認知の発達には著しい障害はないが、社会性の未熟さや想像力に障害がある。本研究の対象児もこの内に含まれる。

##### (2) 学習支援の成果と課題

- ① 主要教科の基礎・基本の内容の掘り下げは教材の工夫に大変役立った。
- ② 手作業を伴う学習が理解を助けた。
- ③ 空間認知の把握が弱い。今後の課題である。

#### 参考資料

- (1) 有安茂己 (2002) 成人期の余暇活動の地域参加 高橋幸三郎編著「知的障害をもつ人の地域生活支援ハンドブック」所収 ミネルヴァ書房
- (2) 村中智彦 (2002) 上越青年の休日を楽しむ会「スパゲッティ教室」の活動について 上越教育大学障害児教育実践センター研究紀要
- (3) SNE ジャーナル第3巻 SNE学会文理閣 1998 p.4~
- (4) 学習障害・学習困難への教育的対応 山口薫著 文教資料協会 2000 p.278~
- (5) LD・ADHD・高機能自閉症児の発達保障 別府悦子著 全国障害児問題研究会出版部 2003 p.117~